

奈良県知事 山下 真殿

三宅町議会議員 松本 健

大和平野中央田園都市構想「(仮称)奈良県立工科大学の整備」の見直しについての要望

背景

私は、1962年生まれの現在60歳。高齢の父と、妻と一人の息子(高1)の4人暮らしです。奈良で生まれ育ち、大阪大学工学部を卒業後、1985年から2011年まで、26年間、民間企業(NEC)でLSIの開発に携わってきました。その間の半導体の性能向上はめざましく、入社後25年でおよそ1000倍の性能向上を果たしています。このことは、自身でも十分に社会貢献を果たしたと思っています。しかしその間、会社の経営は決して良いものではなく、円高、グローバル化、中でもがき苦しみ続けていました。海外に市場を求め、また海外に生産拠点を移し、さらに選択と集中と称して付加価値を追求するなど、いろいろと手を打つものの、私がイメージしていた社会とは「何かが違う」という思いがつのる一方でした。

自分の知恵や能力を生かして社会貢献することで「みんなで豊かになる社会」を作るにはどうすれば良いのか、高度成長の後の失われた30年といわれる期間、我々は何を間違ってきたのか、それを明らかにして我が子らが生きる次の世代に残してゆきたい、そういった思いでここ10年を過ごしてきました。その間、我が子は、幼稚園、小学校、中学校と進み、今高校1年生になっています。子どもと共に今の世の中を見るにつけ、子どもの生きづらさを感じました。今の教育は、「個性を重視」といいながらも、成人に向かうに従い、社会の現実を徐々に知らしめ、画一化を求める。結局、昔と全く変わっていない。

皆が貧しく、規格物を安価に大量に作って売れば経済が成長し、成長を通して皆で豊かになることが出来た時代は既に終わりを告げ、再びその時代に戻ることは出来ません。ある程度皆が豊かになった社会で、さらに皆が豊かになる(経済的だけでなく広い意味での豊かさ、より良く生きること、ウェルビーイング)には、身近なところに創意工夫を取り込み需要を喚起してゆくといった方向が必要になるでしょう。合わせて、教育も多様化してひとりひとりの個性を重視し伸ばし、それを成長(幸せの追求)の糧としてゆくことが必要です。日本がこの先も先進国の一つとして国際社会で活躍してゆくためには、教育によって人材という資源に、そのように投資してゆくしかないと考えています。

大和平野中央プロジェクト

そういった中、私の地元で、奈良県立の工学系大学を作るという話があがってきました。荒井知事の進め方は「産学官民みんながコンソーシアム形式で構想を固めてゆきましょう」というものでした。必ずしも、民の声が反映されているとは思えませんでした。それなりに経験を積んだ大学の教授の方々が、みずからの持つ理想の大学像を語り合われたと思っています。

私の目から見ると、「日本でなぜ起業家が生まれえないか？ 日本の産業の停滞はその辺にあるのではないか？ それに対して教育界に何ができるか？」のような議論が行われていたように感じました。一方でこの話は、スーパーシティの話にもかかわりそうな雰囲気もあり若干の不安を覚えることもありました。三宅町を、「世界でいちばん企業が仕事しやすい町にする」ためのものならお断り。三宅町を、「よりよく生きたい人が集まる場所とする」のとは少し違う気がする。「ここで起業すれば富を得ることが出来る」といって人を集めるのではなく、「ここで起業して自分の夢を果たし社会に貢献したい」という人が集まってくる三宅町でありたいと思っています。

そういう思いを持つ中でこのプロジェクトの中で出てきた言葉がウェルビーイング。「よりよい状態」、「肉体的にも精神的にも社会的にも満たされた状態」を示すものと言われていきます。「今、自分はウェルビーイングな状態で生活しているのだろうか？」「どうやったらウェルビーイングな状態で生きることが出来るのだろうか？」私は、人がそれぞれ自分の特性を生かして、社会貢献出来て、周りの人を喜ばせることで生きがいを感じることが出来る社会、に生きることだと思います。また、そのためには皆がそれなりに経済的にも豊かである必要があります。日本は高度成長を経て、そういった社会に変わってゆくことが可能な段階に来ているものだとも思っています。あとは、社会のちょっとした構造を変えてゆくだけの認識です。

今、県立工科大学には、いろんな人がいろんな夢をお持ちだと思います。教育は小さい時のことが肝心とのことから就業前教育との連携。イノベーションには広く人材の交流が大切とのことから研究者と実業家や住民との交流。その他、リカレント教育、失敗に寛容なカルチャー、などなど。今がまさに「これから」という時期です。是非とも知事の手法で開かれた議論を行ない、コンセプトを見つめなおした上で社会貢献の核となるものに仕上げたいと思っています。

大学の可能性

当初、私はこの大学設置を町の活性化程度にしかとらえていませんでした。駅の乗降客が増えるかな、人口も増えるかな、店舗なども出来るかな、といったことです。また、どうせわが町に大学が来るのであれば、皆が生活の一部として活用できるのが良いなど、公共の機能を入れ込む事や、町自身に文化の空気を持ち込んでもらえれば良いな、とかいったものを掲げていました。

一方で、大学を作っても定員割れにならないか、荒れた状態にならないかな、といった心配もありました。そこで私も、大学を奈良として日本として価値あるものにするにはどうすれば良いか？ といった視点で大学を見つめなおす必要を感じていました。そういった中、折しもスウェーデンの教育を学ぶ機会があり、リカレント教育を知りました。

現在の教育の問題として私は、以下の3点をとらえています。ひとつめは授業料が高すぎる事。これは、貧困の連鎖を生み、公正な社会の妨げになっていると思っています。2つめは、高等教育に向かう道が一本道であるということ。

3つめは、大学が高等学校の延長線上にしかなく、目的を持った学びの場になりにくいこと。

山下知事は、一旦学校を出て職を得た後、学校に行き直して弁護士の道を歩まれました。やる気になれば、誰でもできることなのかもしれません。しかし、学校教育から就業に至るまでの道がほぼ一本道に近く、社会の同調圧力も強いこの世で簡単に出来るものでは無いと思います。

学びなおしが教育全体に影響を及ぼすということ

冒頭で述べた、子どもが成人に近づくと従って社会の現実を知るというのは、今の教育体系の基準で人が選別され分断されて、そのさき人がパーツとして社会に組み込まれてゆくという悲しい現実を物語っています。今の教育による選別体系は、官僚社会を維持するために必要なものなのかもしれません。従って、大学の体系を全て大きく変えることは困難とも言えるでしょう。出来るのは、一部の大学に対して、大学へ向かう進学のパターンを複線にすること、いろいろなバイパス道路を設けることでしょう。それは、どこかの大学が、学びなおしの機会（リカレント教育）を重視すると打ち出すことで叶うと考えています。スウェーデンの大学は、就業後に入学しようとする人に対しては、入学試験で試験の点数にゲタをはかせることで学びなおしにインセンティブを与えているとのこと。もちろん授業料は無料で、寮が完備されており、生活に費用もあまりかからないらしい。まずは、そんな大学が日本に1個ぐらいあっても良いのではないのでしょうか。日本は25歳以上で大学入学する人の割合が3%以下、OECD平均は15%、スイスやスウェーデンは30%弱という数字が出ているそうです。一旦職についた後に、自分の将来や適性を見直して大学に進学するルート、また、一旦大学を卒業して職についた上で、学びなおしの機会を得やすい状況を作ることが、順次、高校や中学の教育に影響を与え、多様性の社会が広がってゆくものと考えます。大学の教室の中に3割の学びなおしの学生がいる教室を想像してみてください。高校からストレートで大学に行った人たちにも、影響を与えるはずです。大学が高校の延長ではなく、実践の学びの場に近づくことになり、それは全ての学生の人生にプラスの影響を与えることでしょう。

なぜ、県がやるのか

もちろん、国が主導でこういった大学を作ってってもらえるに越したことはありません。しかし、実際のところ国としてやるにはいろんな障壁があると思われます。地方で、試してみよう、というのが良いと思います。特区的な扱いでも良いかもしれません。

「奈良には学びなおしを重視する大学がある」ということは、誇れることだと思うし、リスクを受け入れてでもやる価値はあると思います。少なくとも私は、自分の故郷をその実験台に使いたいという話があれば賛同したいと思います。

奈良に人を呼ぶ、は重要だと思います。しかし、一攫千金を狙って優遇された条件で起業を企てるという人を集めるのではなく、科学技術をよりよい暮らしに反映させたい、ここでより良く生きたい、という人が集まる場にすることが私の願いでもあります。